牛ヶ城跡

うしがじょうあと

およそ500年前、室町時代に築かれた山城で、当時は須賀川、岩瀬郡を支配していた二階堂家の家臣、矢田野阿波守がこの城を守っていたといわれます。

天正18年（1590）には、仙台藩祖伊達政宗の軍勢に攻められ一戦を交えました。城の西南、関場山には政宗の重臣、片倉小十郎の指揮する大軍が、南東方向の羽黒山には石川昭光が率いる軍が陣取り、激しい戦いが展開。しかし、耐える大里軍は頭脳的戦略でこれを退けました。

このような戦いぶりから、牛ヶ城は難攻不落の名城ともいわれ、その陰には城代家老の桑名因幡をはじめ多くの家臣たちが、日頃から下松本片平山の中腹にある竹駒稲荷神社を深く信仰していたからといわれました。その後、このことを知った政宗は、この稲荷神社を仙台の岩沼に分霊。祈願所として祭り、朝夕信仰を欠かさなかったといわれます。これが現在、日本三稲荷の一つに数えられる竹駒稲荷神社の始まりです。実は、竹駒稲荷神社の元祖は天栄村にあったのです。

後藤焼窯跡

ごとうやきかまあと

江戸時代後期には、既に焼き物が作られていたという近世の窯跡。窯跡からは摺鉢、壷、皿、上質の花瓶などが発掘されています。陶土は大平山から採れるネズミ色の良質の粘土で、長沼町の長沼焼や栃木県の益子焼にも使用されています。後藤焼を完全な形で所有している人は村内にも少なく、幻の焼き物ともいわれています。

ちなみに現在の国道294号線は江戸時代の旧会津街道とほぼ重なり、この街道はさまざまな焼き物が行き交った、焼き物の道ともいえそうです。

御鍋神社

おなべじんじゃ

時は平安時代中期、平将門が戦いに敗れ、密かに逃れて来たその妻桔梗姫と一族がこの地に隠れ住んでいたという言い伝えがあります。桔梗姫は後に将門の息子平九郎（家臣との説もあり）を出産しますが、前途を悲観して自害してしまいます。残された一族は再起を祈願し、朝延から賜った鍋（鼎）を御神体にして神社を祭りました。それが御鍋神社の起源です。境内には、神社を見守るかのように樹齢500年の2本のヒバ（県緑の文化財指定）が空をさえぎり、鳥居の役目をしています。